

(シンポジウム『未来の社会創造』21世紀の医療の姿と社会デザイン) 6.今,あらためて,  
“生まれる場所”, “死ぬ場所” を考える

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-01-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三砂, ちづる メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10470/00031752">http://hdl.handle.net/10470/00031752</a>

に、聖路加国際大学や全国訪問看護事業協会と共にセミナー等を行っている。

### 5. イノベーション教育とウェルビーイング

(慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科) 前野隆司

2008年に発足した慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント (SDM) 研究科では、新しい価値観の創造と、それに基づく技術・社会システムのデザインを志している。その柱の一つは、ゼロからのイノベーションを生み出すための方法論であるデザイン思考である。デザイン思考とは、観察、アイデア創出、プロトタイプングを繰り返すことによって、現代の社会価値に合致した新たな製品・サービスのデザインを行うための方法論であり、スタンフォード大学やデザインファーム IDEO が発祥とされる。デザイン思考では、質より量、fail fast (早く失敗を)、判断保留、試行錯誤などを推奨することによって、型にはまらない自由なアイデアを創出することを目指している。このため、本講演では、慶應 SDM のイノベーション教育について述べる。

また、講演者は、2008年以來、幸福学の研究を行ってきた。幸福学とは、Psychological Well-Being についての研究の総称である。地球環境や人類繁栄のための持続可能性を考慮した製品・サービス開発や医療・福祉のあり方が必要とされる現代社会において、「そもそも如何にして人々を幸せにすべきか」という根源的価値軸を陽に考慮することが重要と考えられる。このような中、Well-Being を基本に据えた社会デザインを行う必要がある。このため、本講演では筆者が行ってきた幸福学関連研究を概説する。具体的には、幸せの4つの因子を始めとす

る、幸せに寄与する事柄について述べる。さらに、幸せとイノベーションの関連について述べる。

### 6. 今、あらためて、“生まれる場所”、“死ぬ場所”を考える

(津田塾大学学芸学部国際関係学科)

三砂ちづる

いやおうなしに「家で生まれて」、「家で死んで」いた頃、つまりはだいたい、50代後半である私の祖父母の時代から父母の時代にかけての頃の話であるが、きれいで設備が整っていて、立派そうな白衣を着た人が、きびきびと働いている病院、というところは、ある意味、憧れであったに違いない。こんな、汚くて暗い家でなんか産むのは嫌だ、やんごとなき人たちやお金持ちはみんな病院で産んでいるのに。

だから、戦後女性たちは病院出産に憧れるようになり、1960年頃には施設出産と自宅出産はほぼ半々となる。

食べられなくなって、飲めなくなって、枯れるようにして亡くなっていく病人や老人たちを家で見ているからこそ、「もっと何かできることがあったのではないのか」と思い始めて、死にそうな人は、みんな病院に送って「何かしてもらおう」ようになっていく。こちらもだいたい1960年ごろ自宅で死ぬ人と施設で死ぬ人は半々くらいであったらしい。

今や、言うまでもなく日本中の多くの人が「施設で生まれ」「施設で死ぬ」。そのような世代が既に3世代目に入ろうとしているから、「家で生まれて」、「家で死んで」いた頃の記憶は継承されなくなって久しい。「家で生まれて」「家で死ぬ」ことは忘れて良いことではなかった、と考える人もまた増えてきた。私もまたその一人である。